

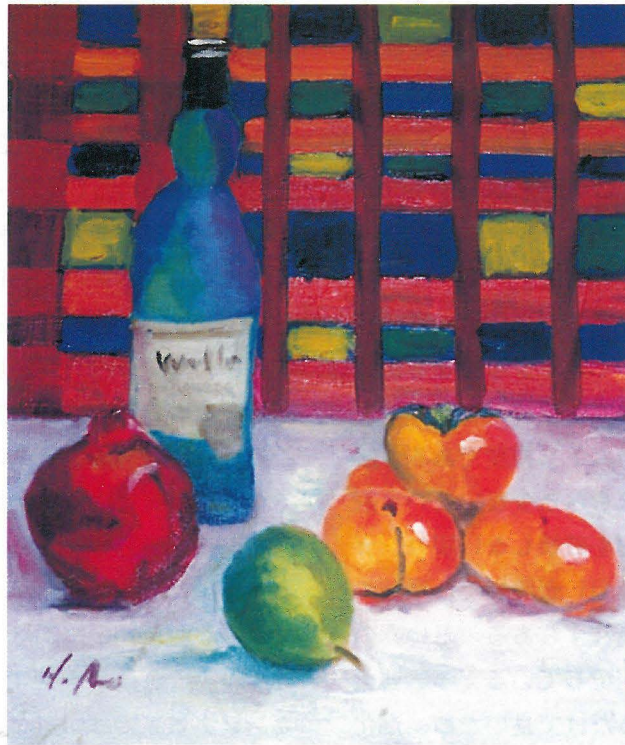
発行所(郵便番号106-0032)  
 東京都港区六本木6-11-9  
 スウェーデンセンタービル5階  
 社団法人スウェーデン社会研究所  
 Tel 03 (5412) 0503  
 Fax 03 (5412) 0549  
 編集責任者 岡 沢 憲 英  
 印刷所 関東図書株式会社  
 定価400円(年間購読料四千元)  
 1999年1月25日発行  
 No.308 第30-31巻 11・12・1合併号  
 (毎月1回25日発行)  
 昭和44年12月23日第3種郵便物認可

# スウェーデン社会研究月報

No.308 Bulletin Vol.30・31 No.11・12・1号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning  
 (The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)  
 Sweden Center Bldg. 5th floor, Roppongi, Minato-ku, Tokyo, Japan

Gott Nytt År!



(青 博章作品, 1998年)

目	次
巻頭写真.....	1 Kultur Klipett より ..... 8
新年のご挨拶.....	2 短期リサーチ in Lund 体験記 .....10
京都会議の問題点.....	2 スウェーデンよりある大学院生のはじめの4ヶ月.....11
劇団グスタフ「令嬢ジュリーを観劇して」.....	4 北欧放浪.....12
お詫びと訂正.....	4 ジャパンカレンダー.....15
1998年総選挙について.....	5 書籍紹介.....16
インフォメーション.....	7 シリーズ エレン・ケイ(3).....17

# 謹 賀 新 年



年頭にあたり、皆様の御達祥お祈り申し上げます。



会長 松 前 達 郎

President, Dr. Tatsuro Matsumae

## 京 都 会 議 の 問 題 点

スウェーデン王立スペース物理研究所 研究員 山内 正敏

Dr. Masatoshi Yamauchi

最近「都市化に依る温度上昇」を温室効果（狭義の global warming）と勘違いしている論調をよく見かけます。これは（原因も影響も）本質的に違うので注意が必要です。で、どちらが本質的に問題であるかとなると一概には言えません。農業にとっては世界的な都市化の影響も深刻かも知れないからです。

(1) 温室効果＝二酸化炭素等のガスによって、地球から宇宙空間へ出ていく熱が少なくなる現象。

これは世界的なものだが、効果は（現在のシュミレーションでは）数十年に1℃程度である。雲の安定化状態を考慮すればもっと少ないという説もある。更に人間が生物圏を破壊しない限り、ガイア機構（一種の自然治癒力）が働いて、増加の傾向が更に抑えられる可能性すらある。というのも、過去の暖かい地球を記憶しているガイア要素（遺伝子）を活性化させるだけで良いため、進化の時間スケジュールより遙かに早い時間でガイア機構が動き出すから。

(2) 都市化＝局所的に熱が大量に発散される現象。

これには化石燃料や（田舎から供給した）電力の使用による熱発散の他に、コンクリートジャングルによって太陽エネルギーが（光合成による吸収を経ることなく）熱に変換される効果に加わる。その意味においては、大規模な森林伐採（例えばアマゾン）も同様の意味を持つ。

都市化が日本列島の様な「気団の境界」（＝大陸と大洋の境）で起こると、気圧配置によっては

（特に季節風や高層風に弱い時に）暑い気団の中心位置を日本側に移動させる効果があって（周縁効果）、都市内部だけでなく地域全体の温度を一律に効率よく上昇させる。現在先進国で人口が集中しているのは大抵が大陸周縁部だからこの効果は日本に留まらないが、その効率、すなわち単位面積あたりのエネルギー使用密度を考えると日本は極めて高く、従って都市化＋周縁効果が世界でも特に大きいと考えられる。この現象で心配になるのは、気団の境界（雨域）を移動させて農業に影響を及ぼしかねない事で、しかも厄介なことに、この効果の計算は（天気の長期予報すらまともにできない現状では）原理的に不可能である。

周縁効果の影響は局地にとどまらず、例えば日本列島規模の温度変化でも世界規模のジェット気流（のうねり）の位置や位相を多少変えるかも知れない。これはメキシコ湾流のみに頼っているスカンジナビアでは切実な問題で（海流が少し変わっただけで気候も大きく変わる）、いくら都市が放出するエネルギーが太陽エネルギーに比べ極めて小さくとも現実には無視できない。

現在進行中の地球温暖化の原因という面から考えると、どちらの効果もあくまで可能性であって<sup>(註1)</sup>、それらが本当にどのくらい効くのかは全く不明のままです。たとえば温室効果の数値シュミレーションがいろいろありますが、いずれも未だに地形や海流すら近似的にしか考慮されていない未熟なもので、もちろん他の効果（例えば都市化や海水面汚染）は無視されています。正しいかどうかとも全く分かりません。都市化の影響（森林

伐採を含む)を、世界レベルはおろか日本列島レベルですら計算した人はいないでしょう。要するに、地球温暖化を起こすいろいろな要因のうち、どれが本当に重要なのかは分かっておらず、現在政治家に注目されている温室効果(それも二酸化炭素のみ)は単に1つの可能性に過ぎないと言うことです。ましてや、現在日本全土レベル(田舎を含む)で観測されている「温度上昇」の主因は都市化(十周縁効果)によるものとみて間違いなく、たとえば琵琶湖の温度上昇がちょっと報告されただけで「世界的温暖化の現れ」とか、ひどい場合には「温室効果の現れ」とか騒ぎたてるのは見当はずれのご都合主義に過ぎません。

地球温暖化議論で大切なのは二酸化炭素の量よりも<sup>(注2)</sup>、エネルギーの使用量(使用密度と総使用量)なのであり、或いは炭素をいかに生物圏の中で「循環」するかであって、そういう立場からすると京都会議の条約(二酸化炭素の量のみを対象)は非常に危険なものです。というのも、地球規模での「エネルギー浪費」や「不完全な炭素循環」の問題が、他の事(二酸化炭素)にすり替えられているから。たとえば二酸化炭素を固定化させれば良いなどという発想が出ていますが、これこそ「ガイア/自然治癒力」の視点からすると暴論です。また、火力の代わりに原発にすれば良いとかいう典型的「すり替え」論議もありますが(と云うのも、放射性廃棄物の危険を棚上げしているから<sup>(注3)</sup>)、すり替え云々の前に出発点からして間違っていて、要はエネルギーを浪費せずに住める都市(例えば冷房のいらぬビル、もっと性格に云えばエアコンを必要としないきれいな外気循環を復活させること)が大切です<sup>(注4)</sup>。そういう方面に一向に議論が向かわないのはどうしてでしょうか?まあ、京都会議では環境問題が話し合われたということ自体は良い傾向なのでしょうが…。

愚見では、(緑を増やすという事は前提として、それ以外に)光合成をする屋根(瓦、セメント)を開発するに勝る解決策はないと思えます。今のバイオ技術なら夢物語でもありません。太陽電池の発想の延長では技術的に難しい<sup>(注5)</sup>。

(注1): 現在まで知られている原因は上記2点の他にもオゾンホールや海面汚染、大洋活動など色々あるが、今の議論には関係な

いので省略した。

(注2): もちろん我々はあらゆる化学物質についても(地球環境という立場から)心配しなければならないが、今の議論には関係ないので省略した。

(注3): あらゆる発電(もっといえば近代人間活動すべて)は自然界に何らかの悪影響を及ぼすのであって、問題はその度合いである。「悪を悪とって何が悪い」という発想では小さな悪を駆逐して大きな悪を残す事になりかねない。ちなみに(私の住む)実験国家スウェーデンでは電力の3分の1が原発だが、これには新しい技術をとにかく試す実験精神もさることながら、「中立」の安全保障を考えている面が大きい。

火力(石油)ばかりに頼っては戦争に巻き込まれる可能性があるから(事故の危険はあっても)原発を併用するのである。決して「安全」だとは言っていない。近年のスウェーデンでの原発廃止の議論には北海油田(天然ガス)の成果が多分にある。日本で原発が反対される理由の一つに政治家が平気で「原発は安全だ」と嘘をつく態度(要するに地元民を馬鹿にした態度)があるのは間違いなく、その嘘への反発が近年あまりに激しいので、今度は新しい嘘として「二酸化炭素よりクリーンだ」などというとんでもない議論がねつ造されたのだろう。成田空港闘争の教訓は(これも地元民を馬鹿にした事に起因する)はあまり生かされていないと見える。

(注4): 必要以上の冷房等で電力を消費している都会民が原発を唱えても説得力がないのはここにも起因する。

(注5): 最近では太陽光で直接冷房するシステムも出来ているらしいが、詳しいことは知らない。

執筆者紹介: やまうち まさとし(1960年生まれ)。

現在スウェーデンのキルナに在住。  
著書には前号でご紹介した「北極圏から手紙」(鉦脈社)などがある。

# 劇団グスタフ「令嬢ジュリー」を観劇して

(スウェーデン大使館後援)

川村学園女子大学教授 早川 克巳

Prof. Katsumi Hayakawa

「あの講堂で新劇の公演ができるのだろうか。」  
そう思いながらスウェーデン大使館に駆けつけた。

前に男女平等問題に関するレクチャーを聞いた覚えがある。さすがスウェーデンと思わせる美しい木造の建物は、道路から奥まったところにあるのはもったいない。だが、レクチャールームとしては最高でも、あの講堂でお芝居とは？正直、そんな思いだった。

ステージには階段がしつらえられ、何かが起きそうな予感にあふれた舞台。高校生のころ読んだ覚えはあったが、筋はとっくに忘れていた。しかしまっさらの頭と心は、かえって素直に魅了されてゆく。A・ストロンドベリの「令嬢ジュリー」。発表当時は過激すぎると出版の引き受けてもなく、劇場も公演を拒否したとか。だが近代リアリズム演劇の傑作の一つといわれている作品だ。私は、北欧を知らないのだが、現代に通じるたくさんのことを感じ取ることができた。

下男ジャンが下心を抱いて伯爵令嬢に言い寄って関係を持ってしまう。上下の身分関係を一階と二階の舞台が暗示する。しかし金持ちのジュリーにしてからが、ぬるま湯的現況からの脱出願望がある。ジャンは一階から二階へ、ジュリーにとっては二階から一階へ、である。妙な迫力のあるジャンの恋人・料理女や夏至祭に浮かれる村人たち…。現実社会の縮図をうかがわせて興味深い。

しかし感激するのは団員たちの熱演だ。すぐ手の届きそうな舞台上、小気味のいいテンポで展開

する演技に観客は、引き付けられていた。階段の昇り降り、ジャンの切るトンボなど、目に見えない練習や精進がうかがえた。公演後、ホワイエで開いたレセプションで、劇団代表で主役を演じた毛利まこさんと話をする機会を得た。「ええ、階段の昇降は大変なんですよ。」汗もかかずに笑っていた。ここでの同作品の公演は三回目。今までと違うステージとしての成功に嬉しそうだった。もっとも劇団グスタフは、すでに百数十回も各地で公演しているから、不勉強なのは当方である。

民芸にいる高校時代の級友の名をあげたら「私たち（新劇）の大先輩ですね」と嬉しいことを言って下さった。三百人劇場で演出を手がけている女性に「映画ばかりでなく舞台も見てくださいね。」と言われたことがあった。こういう小劇団に対する大使館の支援をみると、スウェーデンを福祉や環境からだけでなく、芸術・文化からももっと勉強し直さねばならないと思いながら地下鉄への坂道を下った。

## ——劇団グスタフについてご紹介——

劇団グスタフは、1987年(旧)ピストル射劇団として出発する。代表者は、毛利まこ氏。主な上演作品には、

1988年・『令嬢ジュリー』A・ストロンドベリイ作  
1993年・『中二階のある家』チェーホフ作  
など多数がある。

所在地 〒157-0073 東京都世田谷区砧7-13-4

TEL 03-5494-1749

## お詫びと訂正

前号 No. 307に誤りがございました。執筆者をはじめとして皆様には大変にご迷惑をお掛け致しました。慎んでここにお詫び申し上げ、訂正致します。

1. 表紙 Vol.31 → Vol.30
2. 目次 大使館の催しより…13とインフォメーション…12の行が入れ替わっていました。
3. 8ページ9ページ10ページが入れ替わっていました。正確には、7ページのあとに続くのは9ページ、9ページの次は8ページ、そして8ページから10ページの順番になります。
4. 4ページの写真と12ページのスウェーデンの女の子の写真が入れ替わっていました。
5. 15ページと16ページが入れ替わっていました。

# スウェーデンの総選挙

会 員 高橋 仁

Mr. Hitoshi Takahashi

日本とくらべ欧米の新聞は、紙面の写真にメッセージとドラマ性をより多くこめる。それはスウェーデンでも例外ではない。総選挙の結果が一面を飾った9月21日のスベンスカ・ダグブラデッドの一面トップは、日本人ばりの万歳のポーズをとるキリスト教民主党のスベンソン党首。そして、より具体的な選挙の分析と論評の載った翌22日のトップは、ファッションショップのバーゲン広告に張り替えられ、もはやその広めの額がのぞくだけのパーション首相と社民党の選挙ポスターだった。

前回94年の選挙と比べての劇的な変化といえば、キリスト教民主党の7.7%アップ（得票率）と社民党のマイナス8.7%。そしてこれに左翼党の5.8%の上昇分を加えると、おおかたの選挙の流れがまとめられる。それは冒頭の新聞トップの写真のストーリーとも重なっている。

加えて、もう少し時間軸を多めにとって流れを読み取ってみる。ほぼ1年前の97年9月。与党の社民党が総選挙へのガイドラインを採択する党大会を開くと、実質的な選挙戦がスタートを切った。この時の社民党の支持率は36.2%。94年の総選挙時の45.2%とは比較にならないが、それでも半年前の27.6%からだいぶ持ち直した。そして同時にこの頃注目をひいたのが、支持率を36.2%に上げた穏健党だった。党首カール・ビルトの、ボスニア和平調停で見せた手腕に、スウェーデンではめ

ずらしく「個人の人気で党の支持が上がる」という現象があらわれた。選挙のメインは、社民党対ビルト。1年前はこんな予想だった。

ところが結果は、社民党も穏健党もパッとしないまま伸び悩み。一方でキリスト教民主党と左翼党とが大躍進。つまり保守も左も、それぞれのブロックの浮動票がこの2つに吸収されたようだ。

ではいったいそれらはどのような選挙戦を通じ、どんな有権者の選択の結果もたらされたのか。それを現場からレポートしたい。

社民党は、第一党としての強力な組織に依拠した横綱相撲のような選挙を繰り返していた。それは、選挙の最終盤に国際ゲストを本部に招いて、現場責任者自らがレクチャーをするという「選挙セミナー」を開催したところからもうかがえる。筆者もそのメンバーであったし、イギリスのプレミアの選挙スタッフや欧州全土、そしてイスラエルからも選挙の実務担当者が参加。「見学」というよりは、実際の終盤戦の選挙キャンペーンをケーススタディにしての技術提携のようであった。

スウェーデンの選挙は、「政策で選ぶ」とともに、選挙小屋の光景などから「素朴な選挙」と言われてきた。しかし内実は異なる。それは、日本の金権土壌のような悪しき面があるというのではなく、最先端の情報分析と発信、そしてマーケティングと広告技術を導入した、良い意味での総力戦という意味においてである。

社民党の選挙キャンペーンの中核は、ストックホルムの中心、スベアバーゲンの党本部のワンフロアをぶち抜いた部屋。ここをとり仕切るのは34歳という若いトワルドソン。刻々と報告される支持率の動きと各党党首のスピーチやコメント、マスコミの論評。それを受けてトワルドソンとスタッフの分析と行動が始動する。20日の日曜日の投票日前日の党首の最終スピーチ、それに先立つ金曜日の晩のテレビ討論、そしてそれらとタイミングをあわせて新聞紙面に打ち出される政策と広告。全てが「20%にのぼるアンディサイディッド



1998年 総選挙の結果発表を伝える新聞写真

をターゲットにしたものだ」とトワルドソンは言う。

アンディサイディッド。直訳すれば「まだ決めていない人」、ここ数年とみに増加傾向にあり、政策や争点次第では簡単に政党支持を変える。最近ではその影響力はとて大きく、選挙のキャスティングボートをにぎる。それは世界的に同一傾向にあり、クリントンを支持する米国の中間層やイギリスのブレア労働党の地滑りの勝利を生み出した流れなどがそうだ。ドイツでもこうした有権者が40%になろうとしているとトワルドソンは語っていた。日本でいったら無党派層と言えなくもない。実際、夏の参院選の最終盤での、報道各社すら予想できなかった自民党の経済政策に対する批判票の流れは、各国政党の選挙担当者の関心の的であった。

4年前の総選挙で社民党に有権者が求めたものは、経済と財政の再建だった。社民党は期待に応え財政再建のめどをつけ、総選挙の実質的スタートとなった97年秋の党大会ではその成果を高らかにアピールした。だが、変化はこの時もう現われていた。

トワルドソンら社民党の選挙戦略チームは、この時期すでに全国規模のテレマーケティングを展開。結果は「60%もの有権者が福祉サービスの充実を最優先にという意志表示」を示し、それに続くオピニオンも教育その他社会サービスの給付水準の増加だった。明らかに、当時の社民党が打ち出していた「再建の成果」は、過去の争点となっていた。

そして選挙本番。有権者の気持ちと最も近かったのは左翼党であった。財政再建下でも「福祉水準の維持」を積極的に訴えていた党の方向性から、シニカルに見れば「有権者のほうから近づいてくれた」と言えなくもない。だがどのような要因だろうと、結果的に有権者(アンディサイディッド)の気持ちと二人三脚で投票日のゴールになだれ込んだのは彼らだった。

左ブロックの浮動票の流失を食い止めようと、トワルドソンら社民党の中樞は必死の方向転換を模索した。だが急激な方針の変化は逆に有権者の不振感をあおる。そのことをよく熟知していた彼らだけに、あえて大きな変換は出さなかった。

その逆を行って失敗したのが穏健党だった。地

下鉄やバス停に貼りまくられたカジュアルないでたちの党首ビルトのポスターに象徴されるように、ビルト個人の人気とイメージを全面に立てた戦略に加え、急遽最終盤に有権者にむけた25項目の提案をマスコミ発表。だがこれが足を引っばった。障害者をはじめとする各種福祉の給付アップを大々的に謳ったのだが、財源の裏付けを欠いたとともに、自らの政治信条とは矛盾する論理を露呈し、保守の浮動票は党首スペンソンの誠実さに引き寄せられるようにキリスト教民主党へと流れた。急激な転換と有権者にすりよりすぎても逆に見抜かれてしまうという、スウェーデンの選挙民の民度と情報の充実ぶりが立証されたわけだ。

紙面の都合上紹介しきれないが、ともかく瞬時に変わる情報と民意、それを掴みかつ仕掛けるという近代的な情報戦略の全てが投入されている近代選挙であった。それとともにぜひとも触れなければならないのが、その土壌を提供し相互作用しているマスコミ報道の充実である。

たとえば政党の発行する政策リーフレットなどの質と量はそれほど日本と変わらないのに、有権者が政策として手に取っている情報量と理解度は格段に違う。これには明らかに新聞の量的充実(一人当たりの発行部数の多さ)が寄与している。だからこそ各政党も、トワルドソンの例にもみられるように優秀な人材をこの対応にあてる。

そして報道の質的にも日本とは異なる。タブロイド版などの柔らかい内容の新聞を手にとれば一目瞭然。1面からはじまって全紙面の半分から4分の1は政治ネタである。つまり、日本でならスポーツ新聞のプロ野球の部分がそっくりそのまま政治なのである。日本では自分の年金負担額は知らなくてもヤクルトの野村監督が阪神に移った経緯はみんな知っている。これを逆にしたようなの



街頭の選挙ポスター(社民党)

がスウェーデンである。だから、日本人を取り巻く政治事情と感覚がスウェーデンと比べて先天的に異質で劣っているのではなく、あくまでこうした環境に左右されているのであって、設定が変われば日本人だって同じようになれる。

選挙運動の最終日。ヨーテボリで行われたパーション社民党党首のスピーチ集会を前に、党員が街へくり出し支持を訴える。子供の手を引きながらの人も多く、その子供たちが手に手にバラの花（社民党PRの紙切れのついた）を持ち、通りすがりの人と道筋の家や店に配る。横ではブラスバンドがまるで祭のように演奏しながら伴走する。楽しく、開かれた、そして素朴なスウェーデンの街頭選挙キャンペーン。

けれどももである。これが日本でなら、彼らは全員選挙違反、犯罪者となる。「子供を選挙運動に

動員した」「鐘や太鼓で扇動した」「個別訪問をした」、日本の公職選挙法では明確にこれら全てを禁止している。そしてこの法律から慣習として積み上げられてきた禁止項目がたくさんある。選挙報道の平等性の建て前のもと選挙期間中は候補の個別の活動や政策報道を自主規制する日本のマスコミなどその代表例である。

成熟社会では、緻密な、そして刻々と変わる現象と情報に則した意志決定が求められる。その最たるものであるのが選挙である。社会のスキルとツールを全て動員するような充実した仕組みでスウェーデンでは選挙を組み立てている。一方、同様なことができるだけの材料が社会にありながら、規制と古い慣習とによってそれらを閉じ込めたままの日本。やはり選挙は、その国と社会の縮図である。

## ～Information～

☆在庫書籍・CD 処分ウィンターセール・ダーラナ夏至祭写真展（即売会）

日時：3月10日（水）～13日（土） 13：30～18：30

会場：スウェーデンセンタービル5F スウェーデン社会研究所

日比谷線六本木駅より徒歩10分

10～30%引きの書籍・CDのセールを昨年大好評だった写真展とあわせて開催いたします。

## ～お知らせ～

☆夏期スウェーデン語短期留学ガイダンス

日時：3月13日（土）15：00～16：30

定員：10名迄（参加費：会員2,000円／一般2,500円／資料代含む）

会場：スウェーデン社会研究所事務所 スウェーデンセンタービル5F

- 夏至祭絵はがき12種類（1枚200円）、スウェーデンのレクサンドより直輸入の99年度カレンダー（A3サイズ壁掛け2,500円、A6サイズ卓上型1,500円）、研究所創立30周年を記念したガラスの花模様をモチーフにしたオリジナルペーパーウェイト（半球型）を特別記念価格3,200円にて販売しております。以上送料は別となります。



30周年記念ロゴ入りペーパーウェイト

## ☆月報原稿募集中

「スウェーデン社会研究月報」は、原稿を募集しています。字数は1,600字から3,600字程度。写真、図表も可。スウェーデンについての研究や体験などテーマはスウェーデンに関するものであれば結構です。原稿を採用させて頂いた方には、薄謝をさしあげます。

## お申込・お問い合わせ

〒106-0032 東京都港区六本木6-11-9 スウェーデンセンタービル5F

Tel：03-5412-0503 Fax：03-5412-0549（月～金10：30～17：30）



# KULTURKLIPPET

(文化欄より)

翻訳：山下 亜紀

1998年9月18日付全国紙の文化欄を外務省広報が抜粋し、まとめたものである。

• 9月17日付け Dagens Nyheter 紙においてマスメディア批評家の Guonel Tömänder は次のように書いている。

“彼らはお互いを責め合っていた。彼ら自身が何をし、相手が何をしていないかについてである。Marita Ulvskog に至っては、“あんたは下らない事を言っている。”と発言した。どちらも子供じみたその口論以上に、文化に対する大した興味を持っているとは思えなかった。

その時私は、自身の文学体験やオペラ鑑賞を、そして詩がどのように彼らの感情を思い起こさせたかについてごく自然に語った以前の政治家のことを思い出した。今日の政治家はこと文化に対して文盲（無学）である。とても残念なことだ。”

• Moderatema（穏健党）は文化に予算をかけたくない。”は9月17日付 Dagens Nyheter の中のストックホルム市についてのページに掲載された Petter Beckmans の記事の見出しである。Beckmans は Moderatema 党がセーブしたい文化予算がどのくらいの額であるかについて書いている。

政治家の住処である市庁舎では、注意深く計算された1億2000万クローナ分の蓄えの数字が見つけられる。例を挙げれば、減額されたアトリエ補助金、文化教育協会への補助金、Kulturehuset 並びに世界文化センターへの補助金、そして何よりストックホルム郊外地区への文化補助金がある。

• Mikael Söderlund (Moderatema (穏健党) 所属) はこれらの金額は Moderatema (穏健党) の1998年度予算案によっていること、又ほとんどの項目内容が1999年度でもまだ取り上げられていることを示した。「この事は我が党と、Socialdemokratema (社会民主党) との伝統的な相違点を示している。我々は国民個人の税を下げるにより国民一人一人が手もとに持つ金額を増やしたいのである。

このことは、国民が文化を買うという行為を希薄にさせるものではなく、むしろ逆である。」Mikael Soderlund は又地域補助金としての1000万クローナ失った教育委員会を例に取った。「夜間コースの受講料は少し高くなるであろう。しかしながら、文化教育協会の仕事は増えるはずである。何故なら、国民は講習に通えるだけ多く収入を得るのであるから。」

• アーテストに対する補助金として5200万クローナを支出する代わりに、彼は文化財購入の際の税金控除を実施したいのである。その上図書館の書籍購入、コンピュータ、そして文化財購入にもっと資金を、又 Srsarmuseum と中世美術館に合計350万クローナの補助金を注ぎ込みたいと考えている。

Beckman は、政治的に中間に位置する各党の反対により、Moderatema 党が彼らの政治方針を実行に移すことは出来ないであろうと発言している。

Folk 党文化体育委員会の Madelaine Sjostedt は「我が党が重要視している活動を妨害する彼らの提案にはとても心配している。」と発言した。Folk 党は文化教育協会と世界文化センターへ1500万クローナを減らすことでよしとしている。

• 9月14日付け Aftonblader 紙で Pille Andersson と Jesper Lindau は“選挙において誰もが無視したトピック”つまり文化について次のような事を書いている。

文化はほとんど重要な政治問題と扱われる事が無く、しばしば一種の健康問題や、娯楽、社会経験のように語られている。今日民主主義や社会参加そして一般大衆への文化の供給などは著しく低下している。社会においては経済が重要になり、民主主義の野望は経済的理由に代わられた。

90年代の初頭からは全ての政党が文化を主として社会経済の一部として見だした。このことは、私達が新文化改革と呼びたいほどの大きなことで



あった。

• 政治政党は、文化が新しい収入源を見つけなければならないという見解で同意している。Moderatema (穏健党)はこの問題においても最も革新的でありたく、個人の文化生活を全く国家の監督外におきたいと思っている。政治家が文化に介入しなければいけないほどいい、ということだ。

• どの政党も根本的には同じ考えである。すなわち文化は経済的利益があるもので、経済的価値を証明できない文化が生き残るのはとても難しい。それとも Centern (中央党)の発言を引用すると、「文化は生産性と地域政治の配分の要因の一つであり、観光業の資源であり、創造性の要因である。そして文化はその地のイメージをも作り出す。」(Centern (中央党)、党文書より)

• 選挙運動においての中心的論点は失業率についてである。それだからこそ、Centern (中央党)は文化に予算をつぎ込むことを優先させるべきだと考えている。それは文化を広く発展させるためでもあるが、又労働機会を作り出すためでもあるのだ。

• Socialdemokrater 党と Centern 党はそれだからこそ文化政治においても同意できるのである。しかしながら私達は Socialdemokrater 党こそが現代的で民主的な文化に対する見方を作り出した党である事実を忘れてはならない。そこには古い時代の革新的な、その後一旦失われそうになった古い伝統がある。今日の Socialdemokrater 党の重鎮は、商業主義や利益主義などに対する拒絶意識を持ってはいない。が、ごく最近の1990年、党方針の中で彼等は「余暇の商業化に反対する、それに取って代わる補助金を考える」なることを書いた。

• しかし1997年に開かれた Sundsvallでの“Framtidskongressen (未来についての議会)”以来、彼等は“文化は産業社会から情報社会への過渡期にあって戦略的な意味を持つ”という考えを持つようになった。文化は言葉や音楽そして絵画や写真によって表現されることにより、社会は労働において増大しつづける影響力を持つ。文化それ自体が地域や産業の発展や変化をもたらす重要な源であると理解されたとき、その影響力は最大限のものとなる。(目標は1997年度 Sundsvall 未来議会から)

• 文化は近年一つの投資のように見られている。もしこのことが日曜の選挙結果を左右するもので

あるのなら、複数の党からなる雑多な内閣が生まれることになるであろう。このような内閣においては Miljoparri (環境党)や Kristdemokratema (キリスト教民主社会党)所属の政治家でさえも入閣するであろう。

• これらの文化改革の輪の中に入らない近年大きくなった政党がある。Vansterpartiet (左党)である。「政府は、現時点で文化活動に消極的な層の人々の文化参加を促すことができる。国民レベルの数々の組織、例えば Skadebaman と Konsrtramjandet 等の力が弱くなり、あるいは活動されなくなったり、労働組合の力が落ちてきたことから、労働生活における文化プロジェクトは一層重要である。(左党の発議より)

• Vansterpartiet (左党)と Moderatema (穏健党)は唯一文化を地域配分の要因と数えていない党である。Moderatema 党は、企業や、高学歴者そして有望な人材が文化に誘致されることはないという考えであるからだ。かわりに引く利税率、安い労働力、柔軟な労働権そして交通の便の良さなどこそ資本を引き付けるものだと。

• Vansterpartiet (左党)は経済的論争のみで擁護するには、文化はいまだ重要でありすぎると考えている。左党は政党の中で最高額の税金を文化につぎ込みたいと考えている党であり、その額は1998年度 Socialdemokratema が春の予算に挙げた75億クローナより実に2億5千万クローナ多い額であった。この点において彼等は、Kristendemokratema、Centern、folk、mjlio の各党と同意見である。つまり皆文化に少し余計につぎ込みたいと考えているのである。それに国家予算の話とでもなるとほとんど気づかれずに実行でき、実に簡単なのである。文化に対する政治予算は全ての予算1兆510億クローナの内の75億クローナ、実にたった0.7%の国家予算なのである。

しかしながらこの金額が多すぎると考えるたった一つの政党がある。Moderatema 党である。Moderatema は文化に対する補助金の内6億5千万クローナを減らしたいと考えている。

• 幾つかのアイデアを挙げると、国民教育協会から2億7500万クローナを取り去り、国家の文化委員会の予算の3/2を減らす、国家の舞台活動を中止し、政府コンサート委員会の制作を減らし、Skadebanan を閉め、一冊の本を皆の活動で取り扱われる安価の本の編集をやめ、国営放送のうち1つテレビ局を売りに出し、国営ラジオ2曲を売却するなどである。

## ～短期リサーチ in Lund 体験記～

### Short Stay and Research in Lund

一橋大学大学院修士課程 大久保 彩子

Ms Ayako Ohkubo

「スウェーデンに来るには、季節が悪かったねえ。」…同じせりふを、いったい何人に言われたろう？きれいに色づいた木の葉が落ち、日に日に夜が長くなっていくこの季節、スウェーデン人は総じて気分が落ち込んでしまうのだという。秋が駆け足で去っていくのを肌身で感じながら、10月から12月はじめまでの2ヶ月間、スウェーデン国立ルンド大学環境エネルギーシステム学科（以下、IMES）をベースキャンプとして調査研究を行う機会を得た。目的は、水力発電や風力発電、太陽光発電によって発電された電力を顧客が選んで買うことのできる「エコラベル電力」の実態調査。自己の消費電力のために使われるエネルギー源を、消費者が自ら選択することで電力の「グリーン化＝再生可能化」を目指す取組の一つである。まずIMESのエネルギー研究者に話を聞く。デパートメント内での情報交換は、毎日10時と3時の「お茶の時間」。1日2回のティータイムは、スウェーデン中の大学での習慣だとか。スコーネ地方独特の苦い深煎りコーヒーを片手に、教授も学生も皆自分のペースにあわせてこの時間を利用する。おしゃべりしながら、朝御飯食べるひと、新聞読むひと、あり。皆が読み終わった新聞から、火力発電所閉鎖のニュースや、エコラベル電気を使った鉄道の広告を切り抜く私、あり。メンバーの子どものミニ誕生会、なんてのも、時にはあり。だいたい20分くらいで各自仕事に戻る。皆普段はゼミなどをのぞけば個室で集中して仕事をするだけに、こうした時間は気分転換にもなり、仕事にもメリハリがつく。さて、研究テーマのエコラベル電気についてであるが、1996年に始まったばかりのこの制度は、まだあまり研究されておらず、データも少ない。エコラベル認証機関であるスウェーデン自然保護協会、実際に認証を受けている電

力会社に直接聞くことを薦められる。スウェーデン国内の電力供給事業者約200社のうち、約50社がエコラベル電力供給のための認証を受けている。この50社に、電話をかけて担当者が誰か確認した上で、質問書を送る。（のこり約150社には、会社名のみで送付。）電話での問い合わせでは、ルンド大学工学部に在籍中のヨアキム君にも助けを借りた。スウェーデンでは、英語はかなり通じるが、限られた時間の中で適切な担当者をみつけようとする、現地語の重要性を改めて実感する。とはいえ私は、自己紹介だけ、それも発音のあやしいスウェーデン語で挑戦し、あとは英語で問い合わせ。11月はじめには、「エコラベル電気」制度の仕掛け人で、スウェーデン自然保護協会理事をつとめる Thomas Kaberger 氏にインタビュー。エコラベル電気の仕組みが、如何にして「電力のグリーン化」に向けて効果を発揮しうるのか、展望を語っていただけた。また11月後半の約一週間は、ストックホルムとオスロにて大手電力会社や、地球環境問題に取り組む研究所を尋ねることができた。短い滞在期間中、最も印象深いのは、「何かしようとしている者に対して、決して押しつけにならず、かといって過保護にもならず、自分はどうサポートできるか」真摯に対応するという空気である。IMESでは、先生方と大学院生が同じ建物に研究室を持ち、気軽にディスカッションできる雰囲気がある。特に事前に手紙にて研究指導をお願いした先生には、色々な面で相談にのっていただいた。また現地に滞在中の日本人の方々にもたいへんお世話になった。研究対象の実体に触れるということは、実は入り口にしかすぎないかもしれないが、そこから広がる世界を人とのつながりにおいて感じることはできたことは、私にとって今後の大きな糧となるとおもう。

## スウェーデン、ルンドより ある大学院生のはじめの4ヶ月

国際産業経済環境研究所 (IIIEE)

環境管理政策修士過程プログラム

東條 なお子

Ms. Naoko Tohjoh

今年8月よりスウェーデン、ルンドにある国際産業経済環境研究所 (International Institute for Industrial Environmental Economics, 以下省略 IIIEE) にて14ヶ月の修士課程プログラムを受講させていただき始め、早くも4ヶ月が経とうとしている。先日当研究所を訪ねられた飯田哲也氏より、こちらでの生活についての記事を書いてみないか、とのお話をいただき、こちらでの4ヶ月の様子を紹介させていただくこととなった。

ルンドは、スウェーデン南部スコーネ地方西側に位置し、スカンジナビア南部を統一する大聖堂があったことから地域の宗教上の拠点として発達した。デンマーク・スウェーデン間の領地争いが激しく行われた所でもある。17世紀半ば、この地がスウェーデンの支配下に戻ったあと、地域にスウェーデン文化を定着させる、という目的を主眼に大学が開かれることとなり、以来人口の半数以上が大学関係者という現在まで大学町として発展してきた。煉瓦づくりの建物の壁をうっそうと覆うつたが美しい、古い町並みの残る落ち着いた町だが、同時に大学の技術学部が企業との研究提携を進めていることから、テトラパック、エリクソンなど大企業の本社の所在地でもある。自転車利用者が非常に多く、随所に駐輪場があり、自転車専用道が整っているところもある。逆に車にとっては一方通行、通行禁止道が多く、運転しにくい町ようだ。バスも多いが、あまり混んでいる様子ではない。比較的海に近いこともあり、気候はスウェーデン内では穏やかな方というが、11月以降の平均気温は0度前後だ。大雪が降らない分、霧、雨が多く、レインコートは必需品だ。最近日はもめっきり短くなり、朝8時に寮を出る時はまだ暗く、夕方4時過ぎにはもう真っ暗になる。

IIIEE は、歴史博物館、ルンドのシンボルともいえる大聖堂などのそば、町のほぼ真ん中に位置する。私の専攻している環境管理政策というコー

スは、持続可能な社会を構築していくために考慮すべきことを、社会を構成する多くの要素やその関連性の学習を通して、現在及び未来の“意思決定者”達に教授する、という目的の下 IIIEE に開設され、今年で4期目を迎える。今年受講者は、諸自然科学、経済、法律等を専攻し、多くが政府、民間会社、NGO、その他で働いてきた25カ国から集った36人である。8月の中旬からの準備コースに続き、8月31日より前半の基礎ブロックが始まった。このブロックは12月18日に終わり、来年1月中旬より5月末まで後半の応用ブロックが設けられ、その後4ヶ月で修士論文を書く。9月半ばには一週間の論文審査があり、ここまで無事にパスすると9月末に卒業式だ。授業は英語(残念ながらスウェーデン語はほとんど上達しない)で行われ、基礎ブロックでは、クリーナー・プロダクション、環境経済、環境技術、ビジネス基礎など、6分野の勉強をした。

このコースの特徴といえば、科目が多分野にわたっていることはもちろん、グループでの発表、課題、実習の多いことだろう。今後の社会では個人プレーではなく多数との連携が必須である、という方針の下、クラス内でのディスカッションからレポート、発表にいたるまで、ほとんどが2人から6人のグループ単位で行われる。一口にグループ活動、といっても、前述の通り、36人の多種多様な国籍、経歴の持ち主が集っており、その都度メンバーも違えば、コースのきつきから時間的、精神的に余裕がないことも多く、まとめていくのはなかなか難しい。何事も数学やグラフを用いて説明しようとする人もいれば、数字、公式はなるべく避け、文字で表わそう、という人もいる。頭の回転の速さ、英語を母国語としているかどうか、それに何よりも、文化的背景の違いから、意見の出し方もスピードも人それぞれだ。声の大きい者勝ち、という感じで話す人と、どちらかという静

かな人達との間に、無言の(多くの場合静かな人達の側のストレス、という形で)あつれきが生じたりもする。ただ、本当に優秀で、基本的に非常にあたたかな人が集っており、あつれきが生じて、根本的な仲違い、になるよりは、それぞれの知らない部分を知る機会ができて結果的には距離が縮まった、ということの方が多様な気がする。

毎朝8時15分から夕方5時までの授業、山のような宿題に加えこういった課題があるため、12時近くまで研究所に在ることになるが、クラスメートと話す機会も必然的に多く、個性、国民性が分かってくるのが面白い。IIIIEEでは、地理的近さも手伝って、バルト3国を始めとする中央、東ヨーロッパ(旧共産圏)との協力関係に力を入れており、同級生でも4分の1近くがこの地域から来ている。今までほとんど接する機会がなかったこの人達との話は(もちろんその他の人たちもだが)新鮮だ。何事にも批判的(時には文句としか受け取れない)な友人から、長きにわたる抵抗の歴史から、ルールがあると反射的に抵抗してしまう、この国民性が変わるのには3世代位かかると思う、と聞き、納得したこともある。ロシア語が共通語として話されるのも(皆、ロシアに対しては強い反抗感を持っているが)最初は驚きだった。また、旧共産圏の男性は(特に男女平等の観念が浸透しているスウェーデン人一般と比して)女性に対するサービスが行き届いている(反対に、女性は甘え上手だ)。スウェーデンに来て、独立心が強く、サービスをがんとして受けつけないような女性に困惑している、という男性の話も聞いた。アジアからの学生は6人いるが(中国2人、マレーシア1人、インド2人、私)、感性的に共通点が多く、多くの面で助けてもらっている。

研究所と寮が中心の生活のため、スウェーデン社会一般については残念ながらあまり知る機会が

ないが、研究所では、伝統行事や研修旅行などを通じてスウェーデン社会を多少なりとも紹介してくれている。歓迎パーティーでは、スウェーデンの夏にはかかせない、というザリガニ料理が出され、シュナップス一気飲みの歌を習った。生態学の授業では、秋には恒例、というきのこ刈りがあり、2時間にもわたる採取の後、研究所に戻ってきのこシチューを作った。スウェーデンでは温泉がないためサウナの人気が高い。研修旅行の際泊まったユースホステルのサウナでは、みんなビールをのみ、歌を歌い、挙げ句の果てには近くの小川(気温8-10度位)に飛び込んで汗を流し、といった調子で、すっかり盛り上がった。12月の第2週には、ルシア祭という、クリスマスを迎えるため伝統行事がスウェーデン全土で行われる。神にその身を捧げるため金持ちの男性との結婚を断り、殺害され、のち聖人となった、イタリア、シシリー島の聖ルシアと、ルシアという言葉の持つ光、という意味が重なって始まったもので、12月で最も日が短いとされるクリスマス前の12月13日、白いドレスを着て頭にろうそくをともした女の子(ルシア)を先頭に少女、少年が行列を作って歩く。研究所にも近くの小学生の扮するルシア一行が夜来て、講堂で歌を歌ったり詩を朗読したりしてくれた。

クラスメートを始め、IIIIEEの研究者、職員の方々、寮の友達など、人間的にも、能力的にも、本当に優れた人たちに囲まれ、多くの新たな人々と知り合い、ルンドー忙しいとも言われるが、非常に密度が濃く、充実したこの過程を共に学ぶことが出来ることは本当に幸せという他ない。クリスマス休暇を挟んで新学期が始まるが、このような環境で勉強できることを感謝しつつ、来年も一生懸命やっていたらと思っています。

(この原稿は1998年12月に入校頂いたものです。)

## 北 欧 放 浪

### Research Trip in Denmark and Gotland

ヤマセミ / 高木学校 朝野 賢司

Mr. Kenji Asano

#### ●チャリダー、エーロ島を走る

朝の冷気に包まれながら、この季節には珍しい

青空の下をチャリ(自転車)は快調に進む。フュン島(デンマーク)とキール港(ドイツ)との間

に位置するエーロ島は、古くから造船業と航海術が発達し、現在人口約7000人、面積90平方km、南北に細長い小さな島だ。平坦な地形なので、両手に海を望むことができ、海の上に広がる青空はいっそう映える。バイキング時代は、この海から一望できる地形が災いし、彼らの脅威にさらされた。8000平方メートルを誇る地域熱・温水供給設備を持つ島の東端・マスタルまではここから40km。ジャガイモ畑、牧場、その中に立つ風車を眺めながらでペダルは軽い。

私は今年（1998年）10月からの2ヶ月間、10月はデンマーク、11月はスウェーデンのいくつかの島と地域を旅した。旅の目的は、地域でどのような合意形成の下にエネルギー政策が進められているのか、特に島嶼間ネットワーク「アイルネット」について調べることにある。エネルギー市場統合が進むEUで、環境と調和した「持続可能な社会」を目指し、地域戦略の重要性が増してきており、アイルネットはこのプログラムの一環だ。この調査はまた、飯田哲也さん達と来春に沖縄・宮古島を中心として始動させる「日本版・アイルネット」の下調べでもある。ここではサムソ島とゴットランド島での旅の断面を紹介したい。

### ●旅の方法

今回の旅スタイルは極めて単純である。飯田さんが、まず島や地域の最初の受入先に「ケンジという学生が行くから、調査へのアドバイス、安宿の紹介など頼む」という連絡を日本から入れてくれる。私はその最初の受入先で知りたいこと、見たいものを言い、受入先の人からアドバイスを受けて、時として色々とはアレンジしてもらう、というものだ。計画は大雑把で、良く言えばフレキシブルだが「行きあたりばっ旅」という要素が強い旅だった。時にはチャリに乗り、ヒッチハイクをし、滞在期間中、ほとんどの宿泊は親切な方々の自宅に居候していた。「調査研究」だったのか？

### ●再生可能エネルギーの島、サムソ

それでも、やはり調査はした。私がデンマーク

に着き最初に訪れたサムソ島は、エーロ島とフン島を挟んだ向かい側、コペンハーゲンのある東ジューランド島とユトランド半島の間にある。この島も人口約4000人と少なく、夏は旅行者で賑わう避暑地で、新ジャガの産地としても有名だ。

サムソはまた、エーロと同じく、運輸部門を除く、熱と電気のエネルギー消費全てを10年間で100%再生可能エネルギーで賄う計画を持っている。1997年のデンマーク政府による「再生可能エネルギー島」として公式に認められ、バックアップされている島だ。

サムソ・エネルギー会社はこの計画を推進する役割を持ち、コミューンの行政、農業者協会、商業者協会、そして島民サイドのエネルギー・環境事務所の4者代表から構成され、地域のエネルギー会社も参加して、地域で合意を形成しつつ進められている。

他の島民に情報提供を行っている「エネルギーと環境事務所」のソレン・ハムンサーさんは、「再生可能エネルギー家」としてサムソでは有名だ。自宅の畑にある風力発電機や試験的に導入した「電動スクーター」も所有している。「デンマークは国として原発を持たないことを1976年に決めた。『エネルギー21』という再生可能エネルギー普及政策も定めた。風況の良いこの島で、風車を回さない手はないだろう」と意気盛んだ。

デンマークは風力発電機を株分けし、共同購入し、発電による利益を購入して分配する風力協同組合が世界で最初にでき、発達していった。

サムソもその例外でなく、島内にある8基の400~600kWの風車は全て風力協同組合方式の所有で、今後10年でこの方式で基の風車もたれる予定だ。

デンマーク風力産業の興隆は、制度的な優遇政策があったことはもちろんだが、こういう草の根運動が果たした役割は大きい。多くの人が参加し、「エネルギーとは何だ、持続可能な社会とは何だ」という問題提起にもなる。また景観や騒音問題が指摘される風車の公的認知も高くなるのだから。

デンマークを1ヶ月旅して感ずるのは、しなやかさと、したたかさだ。彼らには今後世界が必然的に向うべき姿と、その時に小国・デンマークがとるべき道は常にその先を走ることだ、というビジョンがある。デンマークの風力産業が2万人の雇用を生み出していたり、好調な経済が続くデンマークには多国籍企業が皆無に近いということはこの辺も無関係ではあるまい。政策決定の要所にNGOがかんでいたり、草の根と制度面でのスムーズな連携をみていると成熟しつつある「大人の社会」を感じるのだった。

### ●モニカとの恋!?

2ヶ月も滞在したのだから、恋愛の1つや、2つあっても不思議はない。

モニカ・ニコルソンさんは身長約170cm、青い眼で白髪の美しい女性だ。バルト海の中央に浮かぶスウェーデン・ゴットランド島での、私の居候先がヘムンセという小さな村にある彼女の家だった。ここはゴットランドの中心地・ビスピィから南東に50km離れたところにある。

モニカは既婚者だ。お連れ合いのヨーテはウインド・カンパニーエットという93年に設立された風力発電ベンチャー企業に勤めている。ゴットランドはスウェーデン第一の風力適地で、島内には大小110基の風車があり、中でも風況の良い南部には70基が林立するウインドファームがある。ヨーテはスウェーデン初の風力協同組合を最初に組織し、それをベンチャー企業として発展させた人物だ。

私はこの会社（というより事務所）で約2週間の滞在中、机と電話を借りて、アポをとったり、資料を読んだりしていた。ここの会社は社員4人だけということもあって、忙しさは「日本的」なものも少しある。ヨーテもデンマークやラトビアなど出張が多く、私の滞在中は2、3日しか自宅にいなかった。

そうするとモニカと私は2人になる機会が多くなる。リング摘みや薪割りの手伝いなどとしたし、

ヘムンセの村を夜散歩して、教会や民衆学校、彼女が働くデイケアセンターなども案内してもらった。彼女は本当に親切で、英語も達者で、何より身振り手振りの表現方法がかわいらしかった。例えば宮古島には美しい珊瑚礁があり、1年に1度、大潮の時に見れる珊瑚の大陸もある、という話をした時だ。彼女は目を丸くし爛々と輝かせながら、舌をペコちゃん人形のように出して「そんなかわいい島があるなら、是非泳ぎたい。ケンジ案内してね」と言うのだった。

だから別れの日には辛かった。あなたと会えて本当に幸せでした、色々ありがとうと言ったら、モニカは悲しそうな顔で「来年の夏また戻っておいで」と抱擁してきた。この旅の間に本当に多くの人達にお世話になったが、別れがこんなに辛いのはあなただけです。さようなら、モニカ。

私と同じ年齢のモニカの娘さんにも別れを告げ（抱擁なし）、私はゴットランドを後にした。え!?!モニカは何歳かって?よく知らないけど55歳くらいかなあ。

### ●旅を終えて

あっという間に2ヶ月の旅は終わってしまった。

来年春、前述したようにアイルネット・ジャパンが始動する。私が今回の旅を終え考えているのは、アイルネットを仕事として立ち上げたいし、それは可能だということだ。そんな甘くはいかないのは分かっているが、経験と知識を積みばなんとかなるのではないかと楽観している。そのためには北欧諸国の経験は良い参考になるだろう。今後もフォローしたい。

### ●謝 辞

今回の旅は本当に多くの方々にお世話になりました。日本人の方では、飯田哲也さんはもちろんのこと、ルンド滞在中は松田正久先生、知子さん、に特にお世話になりました。本当にありがとうございました。

# Japan Calendar

カイ・レイニウス 報道参事官

1999年2月号

NEW LIFE—スウェーデンの若手芸術家5人が来日。

今月12日から来月13日まで、スウェーデン、デンマーク、そして日本の若手芸術家による展覧会“New Life”が都内7ヶ所にて開かれる。スウェーデンからの参加アーティストは、Elin Wikstrom (エーリン・イクストレム)、Henrik Hakansson (ヘンリック・ホーカンソン)、Magnus Wallin (マグヌス・ヴァーリーン)、Peter Geachwind (ペーテル・ケシュヴィンド)、そして Steven Bachelder (スティープン・パチェルダ)。大使館は、この展覧会における様々な面で深く関わっており、12日には、オープニングパーティーを開き、ホーカンソン氏の作品を3月4日まで展示する予定。このオープニングに際し、セミナーも開く予定。タイトルは、“Ladividuality & Madness”で、地理、技術、そして社会と関連した現代美術の新しい傾向について講演が行われる。パネリストの一人として、スウェーデンより特別招待された芸術評論家 Mr. John Peter Nilson (ジョン・ペーテル・ニルソン) が参加する。この展示は、都内各地で大きな反響を呼ぶと期待されている。ME/kr

**ME :** 本館  
tel: 5562-5050  
fax: 5562-9095  
home page:  
<http://www.twica.com/~swedenib>

**CO :** 商務部  
tel: 5562-5000  
fax: 5562-9080

**STO :** 科学技術部  
tel: 5562-5030  
fax: 5562-9090  
home page:  
<http://www.bekkoame.or.jp/~Tokyo/>

**ISA :** 投資部  
tel: 5562-5014  
fax: 5562-5130

スウェーデンと日本のキュレーターや評論家(スウェーデンからは John Peter Nilson が参加)そして、美術大学教授が参加する。(招待客のみ)

時間: 18:30-20:00  
(セミナー)

20:00~  
(レセプション)

場所: 大使館展示ホール  
ME/kr

13-19日  
State Secretary 来日  
スウェーデン財務省財務次官の Mrs Knri Latsbarg (カーリ・ロツツペリ) が、日本の外務省の招待により来日する。

15日  
SWEA スウェーデン現代美術後援会

SWEA 東京支部から招待を受けた美術評論家の Johon Peter Nilsson が講演を行う。演題は、“The sontemporary art scene in Scandinavia” (招待客のみ)。

時間: 18:00  
場所: 大使館クラブルーム  
ME/kr

18日  
北海道スウェーデン協会20周年記念

北海道スウェーデン協会設立20周年を記念して夕食会が開かれ、クムリーン大使がスピーチを行う。

時間: 18:00  
場所: ホテル モントレ、札幌  
ME/kr

26日  
田中一郎氏が退官パーティー 大使館商務部に長年に勤務された副領事田中一郎氏の退官パーティーが大使公邸にて開かれる。田中氏は28年にも及ぶ勤務で、スウェーデン・日本間のビジネス促進に大きく貢献した。

時間: 18:00-20:00  
場所: 大使公邸  
CO/ef

## 行事予定

### 2月

12日  
展覧会“New Life”開催  
スウェーデンの芸術家5人— Elin Wikstrom, Henrik Hakansson, Magnus Wallin, Peter Geachwind, Steven Bachelder—による現代美術展覧会のオープニングパーティーが大使館にて開かれる。パーティーの前にセミナー“Ladividuality & Madness”もあり、ス

### 3月

2-7日  
ペーデル・エーケゴード展覧会  
スウェーデン人画家 Peder Ekegardh が他のヨーロッパの画家と共に展覧会を開催する。2日には、オープニングパーティーが開かれる。場所は、丸の内にある東京国際フォーラム。詳しくは、Tel: 5221-9000まで。  
ME/kr

# 書籍紹介 Books



## 『現地から伝えるー スウェーデンの高齢者ケアー ー高齢者を支える民主主義の土壌ー』 訓覇 法子 著 自治研究社

定価1226円→会員割引価格 1100円

著者紹介 くるべ のりこ

三重県生まれ。日本福祉大学、ストックホルム大学に学ぶ。現在ストックホルム大学大学院研究員。

著書に『スウェーデン人は今幸せか』(NHKブックス)、『スウェーデンの四季暦』(東京書籍)などがある。



## 『NGOの先進国スウェーデン』

馬橋憲男 著  
明石書店

定価2300円→会員割引価格2100円

著者紹介 うまはし のりお

1947年生まれ。大学卒業後、共同通信社へ記者として入社。1975年から国連広報センター勤務。現在、中部大学教授。



## 『アルフレッド・ノーベル伝 ーソフィーへの218通の手紙からー』

服部まこと 訳  
新評論

定価5800円+税→会員割引価格5500円

訳者紹介 はっとり まこと

1949年生まれ。デンマークに12年間滞在し、東海大学ヨーロッパ学術センターで国際交流や文化紹介等に従事する。現在は、大学で留学生や異文化交流の仕事に携わる傍ら、北欧関係の翻訳を専門にする。

ブラインホルストの『われら北欧人』マーチン・アナセン・ネクセの小説『ペレ』等の訳書がある。



## 『エイジングソサエティ スウェーデンの経験』

岡沢憲美、多田葉子 共著  
早稲田大学出版部

定価2600円+税

著者紹介 おかざわ のりお

1944年、上海生まれ。

早稲田大学大学院政治学研究科博士課程を経て、現在早稲田大学社会科学部教授、厚生省人口問題審議会委員、総理府男女共同参画審議会委員。

著書『スウェーデンを検証する 増補版』(早稲田大学出版部)『スウェーデンの挑戦』(岩波書店)他

ただ ようこ

1967年、東京生まれ。

早稲田大学大学院政治学研究科修士課程、スウェーデンベクショウ大学修士課程を経て、現在スウェーデンルンド大学社会福祉学部大学院博士課程在学、医療経済研究機構、スウェーデン医療保障制度研究会、海外アドバイザー

## 書籍の講読方法について

ここでご紹介している書籍は、会員の方々には割引価格にてご購入頂けます。

但し、割引価格のないものはお取り扱いしておりません。

また、送料は、別途頂戴致します。ご注文は、購入を希望される書籍をお電話、ファックスでご連絡下さい。

書籍の代金が、送料を含め1万円を超える場合には、前払いをお願いいたします。

書籍の代金のお振込は、郵便振替にてお願いしています。郵便振替口座は、口座番号が0018 08 84429、加入者名は、社団法人スウェーデン社会研究所です。



## エレン・ケイ『児童の世紀』から100年

The 100 Years from “The Century of Child” (by Ellen Key)

白鷗大学教授 荒井 洸

Prof. Kiyoshi Arai

「エレン・ケイ『児童の世紀』から100年」というタイトルで、連載をさせていただいている。西暦2000年が『児童の世紀』の出版から100年めであることを記念しての執筆である。今回は、その3回目である。

その1 1900年・センセーショナルな発言  
その2 子どもの成長と家庭の持つ意味  
その3 エレン・ケイを受け止めた日本の女性  
スウェーデンの女性の思想家が1世紀前に著した本書に、注目していただければ幸いである。

### その3 エレン・ケイを受け止めた日本の女性

#### ○1911年、『青踏』の発刊

1911年9月、かの有名な『青踏』が創刊された。明治44年のことである。

『青踏』は、女性のみによる文芸誌として創刊されたものだが、そこには社会評論的なものもつぎつぎに掲載された。いま、それらの評論をあれこれと読み拾ってみると、そのデモクラシーやヒューマニズムへのセンス、確信に満ちた姿勢、そして、それらの発言に力の限り注ぎ込まれたエネルギーには、圧倒されるばかりだ。

それに対比して、当時の識者と言われる高名な男性諸氏たちによる女性問題についての発言の、何とみじめな、何と迫力のないことよ。



本間久雄著『エレン・ケイ思想の真髓』  
1915年（大正4年）、大同館書店

青踏グループの女性たちのデモクラティックな主張が、われわれ日本の一般の男性に納得ずくで理解されるには、80年あまりの歳月と、歴史の悲劇や苦しみ、そして何よりも、数限りない女性自身による奮闘が必要であったということなのだろう。

#### ○日本の女性解放史におけるエレン・ケイ

ところで、エレン・ケイは、1900年から1910年のあいだに、『児童の世紀』『恋愛と結婚』『婦人運動』等々の主要な著作をつぎつぎに世に送り出した。そして、わが日本においては、1906年（明治39年）に、教育学の大村仁太郎が『二十世紀は児童の世紀』を同文館から刊行したのを手始めとして、同じ教育学の小西重直、英文科を卒業した原田実、文芸評論の本間久雄などが、エレン・ケイの著作を盛んに訳出したり、紹介したりした。

そこに、よく磨かれたアンテナを立てていたのが、平塚らいてう等、青踏のグループの面々であった。「待ってました！」というのは、このような時のことを言うのであろう。

女性差別そのもののような当時の時代風潮の中で、敢然と女性解放ののろしを上げた彼女たちにとって、エレン・ケイの見事なまでに豊かな思想的裏付けのある女性解放や母性保護への主張は、100パーセントと言ってよいほどの、力となり、肉ともなったのである。



エレン・ケイ女史原著 原田實訳『恋愛と結婚』  
1924年（大正13年）、聚英閣

ちなみに、平塚らいてうは、1913年（大正2年）から『青踏』の誌上に、『恋愛と結婚』の英訳本からの翻訳を載せ始めた。彼女の他には、同じ青踏グループの、山田わか、伊藤野枝などがエレン・ケイの紹介に努めている。

なお、平塚らいてうは1919年（大正8年）に、新潮社から翻訳書である『母性の復興』を出している。

#### ○エレン・ケイを、しっかりと受け止めた平塚らいてう

平塚らいてうは、『個人』としての生活と『性』としての生活との間の争闘について（野枝さんに）（『青踏』第5巻8号）という手紙スタイルの文章の中でエレン・ケイをかなり引用しながら論を進めている。次のような具合である。

「よし自分は自分の他の方面の生活のために、自分の魂のすべてを子供の世話や教育に与えることができないにしても、そしてそれはなるほど自分にとっては苦しいことであり、子供にとっても不幸なことであるにしても、それでもなお全く無自覚な無智な劣等な女から、しかも愛なき結合の中から生れ、そういう母の無責任な手によって育てられる今日の日本の多数の子供に比較すれば、それはきっとより優れた、そしてより幸福なものに相違いないと。…野枝さん、私がエレン・ケイの *The Renaissance of Motherhood* を読んだのは、ちょうどこの間から、この後にかけてのことでした。」

「ミセス・ギルマン一派の婦人論者は、婦人を今日家庭生活における雑務から脱せしめ、社会の

人として経済的独立を有するものとしなければ、そして育児、教育、料理などはすべてそれぞれの専門家の手に任せるようにしなければ婦人の生活には真の自由も解放も来ないというようなことを言っています。ところがエレン・ケイはこれに反して、これらのいわゆる解放せられたる婦人を再び家庭に引き戻し、愛の生活の中に、就中（なかんずく）母たることのなかに最も高く美しき統一と調和ある婦人の真生活を発見させようとしております。彼女のいわゆる『大恋愛』こそ人間生活の根底に横たわる相容れない諸力を、対立せる二元を調和統一するところのものなのです。」

自分はいま、『児童の世紀』を精読しているのだが、せんえつなもの言いながら平塚らいてうの読みは深く、確かなものだと思う。平塚らいてう、そして青踏グループのメンバーたちは、エレン・ケイから、そのエッセンスをしっかりと吸収していたと考えてよいだろう。

#### ○コラム風に

1915年（大正4年）に出された『青踏』（第5巻10号）に、「戦禍」という作品がある。作者は、斎賀 琴（さいか こと）となっている。

内容は、日露戦争当時の、作者の故郷、現在の千葉県市原市あたりの様子についての、少女時代の思い出を記したものである。国家による戦争というものが、個々の家庭や、か弱い個人々にもたらす悲しさを、実に清らかな文体で描き出している。思わず心が深く沈むと言おうか、本物の涙と悲しみとが湧いてくる、すばらしい作品である。

この作者である斎賀 琴は、『青踏』に多くの作品を発表したのだが、彼女が『児童の世紀』の翻訳者である原田実の妻となる人である。ちなみに、原田実も千葉県の出身である。

そのことを知って、再び原田実先生による翻訳を読み、琴さんの作品を読み直すと、その味わいはより深いものとなってくる。

※本稿に掲載した写真は、筆者所蔵のものを撮影しました。

※本稿の執筆については、下記の本より多くのことがらを学ばせていただきました。

- ・小林登美枝著『平塚らいてう』清水書院、1983年
- ・堀場清子編『青踏女性解放論集』岩波文庫、1991年

（次号に続く）